

第5室

(5) 9:30 ~ 10:00 (6) 10:10 ~ 10:40
(7) 10:50 ~ 11:20 (8) 11:30 ~ 12:00

第5室 (5)

SNS X

小学校低学年に対する語彙指導法の検討

—Focus on Forms と Focus on Form の比較—

折橋 晃美 (長野県佐久市立野沢小学校 / 東京家政大学大学院生)

本研究の目的は、2つの教育的アプローチ (Focus on Forms と Focus on Form) が、日本の学校教育における低学年の、しかも外国語の初学者に対して、英語の語彙習得に及ぼす影響を調査することである。Focus on Forms と Focus on Form を定義し、それぞれの理論的根拠を検討し、Focus on Forms (present-practice-produce) と Focus on Form (task-based teaching) をどのように実現できるかを調査した。初級レベルの学習者の場合、task-based teaching は、production-based tasks よりもむしろ、comprehension-based tasks の観点から最も適切に運用されることが実証されている。Shintani (2013) の replication の一部である、語彙テストの結果から、語彙習得に対するそれぞれの教育的アプローチの効果を比較した。

第5室 (6)

SNS X

大学生英語学習者の語彙学習活動に関する調査：

語彙学習支援に必要な課題発見のために

古荘 智子 (愛知大学他非常勤・名古屋大学大学院情報学研究科博士後期過程)

北神 慎司 (名古屋大学大学院情報学研究科)

英語語彙の学習は読解や文法などに比べ、授業内で教員から様々な学習法を体系的・具体的に学ぶ時間が少なく、授業外での学習者自身による個別学習に頼る傾向が強い。そのため、教員側は学習者がどの様な語彙学習方略を用い、どの様に学習に取り組んでいるのかを把握することが難しく、学習者のレベルや目的に合わせた学習支援をすることが難しい。本研究の目的は、大学生英語学習者の語彙学習方略の使用実態を明らかにするとともに、英語の成績が低い学習者の語彙学習における問題点を可視化することである。参加者は高度な英語運用能力の習得を目指す学部の大学生英語学習者 (18歳~21歳) 81名で、TOEIC のスコアを基準に上位・中位・下位の3つのグループに分けた。調査は MIZUMOTO and TAKEUCHI (2009) を参考に学習方略に関する質問紙 (31項目) を作成し、2021年1月中旬に Google Form を用いて実施した。回答は各項目について「1. まったく当てはまらない」から「7. とても当てはまる」の7件法で実施した。語彙学習方略の使用について明らかにするために、最尤法プロマックス回転による因子分析を行った。因子数はスクリープロットから5因子とし「目的達成型」「自己管理型」「実践志向型」

「授業（教員）主体型」「暗記学習型」と命名した。次に、語彙学習方略と英語力（TOEIC スコア）との関連性を調べるために、独立変数を TOEIC スコア（3水準）と学習方略（5水準）、従属変数を使用頻度とする 2 要因混合計画による分散分析を行なった結果、TOEIC 下位グループの学習者と上位グループの学習者間には、暗記方略や目標達成型方略には差がないが、自己管理方略および、実践志向型方略には有意な差が示され、TOEIC 高得点者ほどこれらの方略の使用頻度が高いことが明らかになった。このことから、低得点者には自己管理の重要性を教示するとともに、自己管理方略に関連する知識およびスキルの習得を促すための介入策を検討することが課題となった。

第5室 (7)

コーパス言語学の手法に基づく英語確信度副詞の抽出とその使用範囲の解明

—CORE コーパスの33種のレジスター別頻度調査に基づいて—

飯島 真之（神戸大学大学院生）

英語使用において確信度の度合いを表す副詞（確信度副詞）を適切に用い、陳述内容に対する自身のスタンスを表出することは重要であるが、それらの指導は必ずしも十分でなく、結果として日本人学習者の確信度副詞使用には多くの問題が残されている。この現状を改善するには、優先的に学ぶべき確信度副詞の抽出やそれらの使用範囲の特定が不可欠となる。Simon-Vandenberg & Aijmer (2007) を含め確信度副詞の頻度調査は過去にもなされているが、先行研究には (1) 対象副詞の範囲が曖昧、(2) 英語の多様なレジスターがカバーされていない、(3) レジスター汎用性が考慮されていない、(4) 個々の副詞の使用範囲が分からない、といった課題も存在する。

本研究はコーパス言語学の分析手法を援用し（石川, 2021）、(1') Quirk et al. (1985), Huddleston & Pullum (2002), Simon-Vandenberg & Aijmer (2007) に基づく 45 種の副詞（強意型副詞 31 種、緩和型副詞 14 種）を対象に (2') 33 種のレジスター資料を包含する CORE (Biber, Egbert, & Davies, 2015) を使用して、(3') 頻度と汎用度の両面から重要副詞を特定し、(4') その使用領域の特定を目指す。調査の結果、RQ1（高頻度の確信度副詞）については、レジスター頻度の平均値に基づき *certainly/clearly/definitely*（強意型）や *probably/maybe/perhaps*（緩和型）などが抽出された。RQ2（高頻度・高汎用度の重要副詞）については、レジスター頻度平均値による順位と、レジスター汎用性（頻度のばらつきを示す変動係数の逆数で定義）による順位の平均値に基づき *certainly/clearly/indeed*（強意型）や *probably/perhaps/apparently*（緩和型）などが抽出された。RQ3（レジスター選好性）については、たとえば、*certainly* は話し言葉/スポーツ/書評で多く、詩・歌詞/百科事典/FAQ で少ないことなどが示された。RQ4（副詞とレジスターの関係性）については、副詞をケース、レジスターを変数とする頻度表に対して対応分析を実施した結果、強意型・緩和型ともに 4 群に大別されることが明らかになった。今後は教員・学習者からのフィードバックを得て、作成したリストの精緻化を図りながら、本リストを使用した教材開発の可能性について検討を深めたい。

英検テスト問題における難易度と頻出前置詞の多義性の関係

南部 匡彦(四国大学)

前置詞の習得が日本人英語学習者にとって一般的に困難な理由のひとつとして、特にその多義性の側面がある。学校英語教育の初期段階から提示される in, on, at 等の前置詞では、その中心的意味は空間領域から時間的領域、そして抽象領域へと意味拡張が起きるため、学習者にとってはその語義の広がりが生み出す多義性が習得の困難さの要因となる(Laufer, 1990, Tyler & Evans, 2003)。従来の語彙指導の現場での辞書的な語義提示を通じた前置詞指導では、周辺的な意味用法の提示順序は指導者の経験と主観に頼らざるを得ないという限界もあり、また学習者の熟達度に応じた語義の提示に対応しきれないという問題もある。

そこで本研究は、教材難易度と多義前置詞の各語義の出現傾向の特徴の関係を定量的・定性的に調査し明らかにすることによって、学習者の熟達度を考慮した語義の提示順を考察し、前置詞の多義語指導における習得促進の手がかりを提供することを目的とする。

調査対象資料は2020年～2016年実施の実用英語技能検定5グレード(延べ総語彙数181,457語)、調査対象となる前置詞は、Dirven(1993)の意味タイプ分類に基づき「離反・近接・経路・鉛直」の働きをする5前置詞(from, by, with, about, over)を中心とした。

調査の結果、(1) G5～G3グレードでも語義が多岐に渡る前置詞、(2) かつ特定のグレードから抽象的用法が偏在する前置詞、(3) 上級グレードから漸次的に語義と抽象的用法が多様化する前置詞、といった大まかな出現傾向があることが明らかになった。

当日の発表では以上の調査をもとに、グレードの変化に伴うそれぞれの前置詞の語義の広がりに関するより詳細な特性を示し、学習者の熟達度に応じた多義語指導においての意味領域提示方法についての考察を行う。